ワークショップⅠ－１

スリランカの伝統医学

樋口 まち子
静岡県立大学 看護学研究科

はじめに：スリランカの医療の歴史は、北インドから仏教が伝来した紀元前3世紀にさかのぼる。それ以前にも土着の民間医療はあったが、インドのアーユルヴェーダの伝来で、スリランカの伝統医療が理論的に裏付けられた。その後、16世紀からポルトガル、オランダ、イギリスの植民地となり、西洋医療が普及したが、伝統医療は医療システムの中に存続し、人々の日常生活の一部として生き続けている。近年はさらに、人口の高齢化や慢性疾患の増加で伝統医療が再認識されているが、その実態を調査研究した先行研究はわずかである。そこで、本研究は、近代医療及び伝統医療機関を利用している患者を対象に受診行動の実態を把握することを目的とする。研究方法：スリランカで自然環境・社会経済及び文化・宗教の異なる農村、漁村と都市近郊の３つの地域において伝統医療機関の患者128人と近代医療機関の患者158人を対象に半構造的質問紙を用いて、面接によりデータ収集し、医療機関選択因子を社会経済的条件、文化・心理・宗教的条件から分析した。結果：伝統医療機関を利用している患者は近代医療機関を利用している患者に比べ年齢が高く、また、教育レベルも高い傾向が見られた。農村部では患者の平均収入はほぼ同様であったが、漁村と都市近郊部では伝統医療を使用している患者の方が収入が高かった。外来患者では医療機関までのアクセスは、伝統医療の方が時間をかけて受診していた。また、一人の患者の診察時間は伝統医療の医師の方が長かった。慢性疾患で受診した患者のうち、関節痛、関節炎、リウマチ熱は伝統医療を、心疾患や高血圧、糖尿病には近代医療に受診していた。伝統医療を受診した患者のうち25%が、直接受診し、63%は近代医療を受診したのち、5.6%が自宅で薬草などの治療を試みていた。一方、近代医療を受診したうち43.5%の患者が他の医療を使用せず、直接受診し、38%が他の近代医療施設を、9.1%が伝統医療を受けていた。医療機関に受診する前に家庭で民間療法を試みたものは、伝統医療機関では50%、近代医療機関では31.6%であった。家庭で治療を試みたもののうち、80%が薬草を使用していた。考察及び結論：1980年代後半に、Glynn, Wolffersが実施したスリランカにおける医療行動の結果と同様にスリランカ人の伝統的医療行動は、疾患に応じて、近代医療と伝統医療を選択していた。他方、地域の特性によって選択する傾向では変化が見られた。また、伝統医療は必ずしもコストが低いとは限らず、相対的に経済的に恵まれた都市部は、近代医療と伝統医療双方へのアクセスがよく、地域間格差が拡大していることが明確になった。

Traditional medicine in Sri Lanka

MACHIKO HIGUCHI
Graduate School of Nursing, University of Shizuoka